

「A」次の文の(訳)の「 」に入る語句として最も適当なものを選び、番号で答えよ。

1 院宣宣旨のなりたるに、しばしもやすらふべからず。(平家物語)

(訳) 上皇の命令が下されたのだから、ちよつとの間も「 」べきでない。

① 離れる ② 休む ③ ためらう ④ 考える 1 「 」

2 遣水心細く、音細くおとなひたり。(十訓抄)

(訳) 遣水が心細く流れ、水の音がか細く「 」ている。

① 過ぎ去つ ② 音を立て ③ 送られ ④ 響き合つ 2 「 」

3 いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。(源氏物語)

(訳) どの帝の御世であったか、女御や更衣が大勢お仕え申し上げなされていた中に、それほど高貴な身分ではない方で、とりわけ(帝の)「 」ていらつしやる方がいた。

① 保護を受け ② 寵愛を受け ③ 接待を受け ④ 指図を受け 3 「 」

4 侮らはしげにもてなす(連中)は、めざましうて、なげのいらへをだにせさせ給はず。(源氏物語)

(訳) 見くだすように「 」連中は、気に入らなくて、(八の宮は姫君達に)かりそめの返事さえも書かせなさない。

① 振る舞う ② 話しかける ③ 招待する ④ からかう 4 「 」

5 藤原良近といふをなむ、まらうとさねにて、その日はあるじまうけしたりける。(伊勢物語)

(訳) 藤原良近という者を、「 」として、その日は客にごちそうした。

① 主人の代理の人 ② 客をもてなす人 ③ 主人に続く人 ④ 客の主たる人 5 「 」

6 「何とまれ、言へかし」とのたまふを、人々もおよすげて見奉る。(増鏡)

(訳) (幼い天皇が)「何でもいいから、和歌を詠んでおくれよ」とおっしゃるのを、人々も「 」ていとお見受けする。

① ふざけ ② 嘆い ③ 大人び ④ 指図し 6 「 」

7 網代車の昔おぼえてやつれたるにて出で給ふ。(源氏物語)

(訳) (源氏は)網代車で昔が思い出される風に「 」ている車で外出なさる。

① 疲れた雰囲気になつ ② 派手な格好になつ ③ 懐かしい雰囲気になつ ④ 地味な格好になつ 7 「 」

8 すみける男、夜深く来ては、まだ暁に帰りなどず。(平中物語)

(訳) 「 」ていた男は、(女のもとに)夜遅く来ては、まだ夜明け前に帰りなどずする。

① 信じ ② 通つ ③ 交際し ④ 愛し 8 「 」

「B」次の文の(訳)の「 」に入る語句を答えよ。

9 かの左衛門督はえなられじ。また、そこにさられば、こと人こそはなるべかなれ。(大鏡)

(訳) あの左衛門督は(中納言に)おなりになることはできないだろう。また、あなたがお「 」になるのならば、違う人がなるだろうということだ。 9 「 」

10 やんごとなき女房の、うちそばみてゐ給へるを見給へば、わが思ふ人なり。(住吉物語)

(訳) 高貴な女性が、ちよつと「 」て座っていらつしやるのを(中将は)ご覧になると、自分の恋い慕う人である。 10 「 」

11 もの思ふ人の魂はげにあくがるものになむありける。(源氏物語)

(訳) もの思いに沈む人の魂は本当に「 」ものであったのだ。 11 「 」

12 昔、男、初冠して、平城の京、春日の里に、しるよしして、狩りに往にけり。(伊勢物語)

(訳) 昔、ある男が、元服して、奈良の都の、春日の里に、「 」縁で、鷹狩りに行った。 12 「 」

解答

【新三年生用】 古文単語330三訂版 P 182～P 191

- 1 「③」
- 2 「②」
- 3 「②」
- 4 「①」
- 5 「④」
- 6 「③」
- 7 「④」
- 8 「②」
- 9 「断り」
- 10 「横を向い」
- 11 「宙にさまよう」
- 12 「土地を領有する」